
元魔王と勇者vs魔王

ひのき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元魔王と勇者vs魔王

【Nコード】

N4362Z

【作者名】

ひのき

【あらすじ】

数々の異世界を旅していた彼はアルスギニアなる世界で魔王をしていた。

そしてお約束で現われた勇者に勝たせてやり他の世界に行こうとするも勇者に危機が迫っているのを知り余興として条件付きで助けてやった。

約束通り六百年後、彼がアルスギニアに再来した時、その世界には新しい魔王の脅威があった。

第一話 プロローグ1

「…はあ、…はあ……」

雨の降り頻るぬかるんだ森のなかを一人の女性が息を切らしながら進んでいる。

歳は二十にさしかかる頃だろう、まだ少女のようなあどけなさの残る容姿で街中を行けば十人がみれば十人がふりかえる美人だった。

しかし、肩から血を流し矢が生えた左足をかばいながら行くその痛々しい姿が全てを台無しにしている。

「私はどうなったって良い。…でも、この子だけは……」

彼女の名はシルファ・フーク。

この世界アルスギニアを侵略し征服しようとした魔王を倒した勇者である。

そんな彼女が、なぜ死にかけているのかといえばその絶大なる勇者の「力」を供給する聖剣ベサルタは教会にあり、手元になくシルファ本人はそこまでの力を持っていないからだ。

だとしてもシルファは常人の数百倍の魔力をもっているがそんなモノで魔王は倒せない。シルファが魔王を倒せたのは単に聖剣ベサルタとの相性と偶然の重なりだけだったのだ。

そしてシルファは魔王討伐の旅の凱旋の折、教会にベサルタを返し

その祝いのパーティーに出席。そこで毒入りの酒を　飲んでしまったのだ。

「なんで、…私は殺され、るんだ……」

「簡単だ。各国の王と教会が民衆の羨望のあつまる貴様を恐れたからだ」

シルファは自問した。そのはずなのに返す声がある。

（…どこ、かで聞いた…、声……）

シルファは周りを見渡すと先の大木に背を預け腕を組む青年がいた。

「おま、えは魔王…！」

あのどこにでもいそうな黒髪黒眼の容姿に見たことも無い服に身を包むあの青年は自らが討滅したはずの魔王だった。

「驚いているな、あんな鈍い一太刀で幾多の異世界を渡り歩いた才レを殺せたと信じ込むとは……呆れたものだ」

魔王は不敵に嗤う。

「そんな、まさ、か…」

シルファは脱力し崩れ落ちた。身体に盛大に泥水がかかる。

（……私と、仲間達の…努力は無駄だったの、か……）

シルファの脳裏にともに戦った仲間達と途中で出会った人々の顔が浮かんでは消えていく。悲しい別れもあった。それでも前を進み続けられたのは彼ら、彼女らの応援があつてこそだったのに。

「成る程、マンティコアの猛毒にマンドラゴラの薬効成分のみを足すことで毒性を強めたものか。教会もえげつのない真似をする」

いつの間にか近付いた魔王がシルファを見下ろし、感心したように頷く。

「……ん？、勇者よ。貴様身籠っているのか」

そうなのだ。

シルファは共に旅をした騎士と恋におち、神から尊き子を授かったのだ。その騎士も森に逃げる途中で囷となって離れてしまった。

魔王はしばし黙考し口を開いた。その口は聖書の挿絵に登場する悪魔のように邪悪に卑下た笑みで固まっていた。

「勇者、オレと賭けをしないか？ オレはもうこの世界に用は無い。欲しい物は手に入れたからな」

魔王は手には一本の剣を持っていた。

所有者に無尽蔵の魔力を与え続け、白銀の刀身を持つそれは、まぎれもなくシルファが教会に返したはずの聖剣ベサルタだ。

「……そこでだ。そうだな……六百年後、オレはまた一度この世界アルスギニアに来訪しよう。それまで貴様の血統が絶えていないのならオレがアルスギニアに平和をもたらす。そのための前提として貴様と貴様の子を助けてやる。貴様には良い提案のはずだ」

悪い条件ではない。

でも、相手はあの魔王だ。信じられる訳がない。

「こつちだ！ 勇者がいたぞ！！」

追っ手が来てしまったようだ。結婚を誓った彼はどうなってしまったんだろう。

「見つかったぞ。推測するに教会の異端討伐部隊だな。捕まれば命はまず無い」

またしても魔王は嗤う。禁断の契約を催促する悪魔のように。乗ってはいけない。断じてそのはずだ。だが、この子のためなら……そう考える自分がいる。シルファは短いのか長かったのかも分からない時間を掛け悩んだあと決断した。自分はどうなっても良い。でもどうしてもこの子だけは助けたい、それこそ悪魔と契約してでも。

「分か、った……」

それを聞いた魔王は口の両端を吊り上げた。

「了承した。跳ぶぞ ダークスプーダー 失踪する影」

聞いた事のない魔法と共にシルファの意識が消失した。

「ん…、朝？」

閉じた目蓋の裏側に光が差し込みシルファは目を覚ました。

（やっぱりあんなの悪い夢だったんだ。魔王が生きているなんてなんて悪夢だったんだろう）

シルファは上半身を起こしてベッドに座った。このベッド、この世の物ではないのでは、というくらいにふかふかで羽毛より軽い。各国の王族でもこれくらいの寝台は使っていないだろう。

「お目覚めのような、勇者」

「な、何者！？」

シルファはとつさに聖剣ベサルタを探すが無処にも無く、よくよく見れば寝ていた部屋も見慣れないものだった。部屋にはシルファの座るベッドしかなく調度品の類も一切ないそれは酷く殺風景で、申し訳程度にガラスの窓がとりつけられている。

「貴様が気絶したものだから、魔王城に運び治療呪文をかけ介抱してやったのだ。感謝しろ」

そうか、あの後私は気絶したんだ。それに言われてみれば身体の痛みも嘘のように消えている。

魔王にここは魔王城のどこだと聞こうと顔をむけた時、ふと視界に魔王の持つ手鏡が映った。しかし手鏡に写る顔はシルファのそれではなかった。

手鏡をひったくりもう一度よくみるがやはり、それはシルファの顔ではない。

「それは【オーダーメイド虚構の自画像】、映った顔の形から髪の色まで自在に変える手鏡だ」

今の、シルファの顔は銀髪銀眼の幻想めいた美人な女性に変わっていた。美人には変わりない。だが、黒髪が主で他にも緑、青、赤、金とさまざまな髪と眼の色がアルスギニアにはあるが銀はないのだ。

「な、なぜこんな事を…？」

「前の顔のままでは勇者だとバレて面倒になるからな。そのためだ」

魔王は一拍あけて、片手を挙げる。

「そして、仕上げに貴様の記憶を消す」

物凄い勢いで魔王はシルファの頭を掴み呪文を唱える。
それが、シルファ・ファークの見た最後の景色だった。

とある村の入り口に一人の銀髪銀眼の女性がそよ風に揺らされている木によりかかるように眠っている。

それを一人の青年が数秒見つめた後、村の反対に向かって歩き出した。

「あの容姿では迫害の的だ。だが、彼女の血は魔力が高い。うまく使えば成り上がる事もできるはずだ」

青年は嗤う。

「六百年後が楽しみだ」

青年が取り出したナイフで空を切るとそこから真つ黒な穴が出現し青年はそこに消えていった。それを見ていたのは銀髪銀眼の眠り姫の傍に降り立った数匹のスズメのみだった。

六百年後 アルスギニア とある丘の上

空間が渦を巻いて歪む。

その歪みは黒く染まっていき虚空に浮かぶ穴となる。

それが一人が通れるほどになるとそこから一人の青年が現われた。

「来てやったぞ。勇者」

第二話 プロローグ2

ネロニス教国に位置する神々への信仰の集まるとされる「教会」の本拠地、マスタリア大聖堂の地価の宝物庫に一人の影があった。

「二千年間、あらゆる世界を旅したオレにこの程度の妨害とは片腹痛い」

彼は周りの恐らくは一生遊んで暮らせるであろう聖遺物には目もくれずに長方形の箱を開けようとしていた。

それは高名な魔導師達が幾重のダミー、呪いのトラップ、魔法による迎撃など少し間違えれば常人では即死レベルの箱なのだが彼はそれを易々と回避して箱を開けた。

その中に納められた剣は魔王……つまりは「彼」を殺したと思われるこの世界にふたつとない聖剣ベサルタだった。

「さて、この世界ともしばしの別れだ。魔王を一討伐したと思われる勇者らの祝宴でも見物するか」

そう言っただけは次の瞬間には宝物庫から消えていた。

時間は夜

「これより魔王討伐の功を為した勇者様とその仲間達を祝う祝宴を執り行う。皆、存分に楽しんでくれたまえ！」

勇者シルファ・ファークの出身地、メノキアス王国の王の言葉によりだっ広い会場が出席者達の声がこだました。

とは言っても、出席者のほとんどが高そうな正装に身をつつんだ上級貴族が各国の王ばかりだったが。

「実際、あいつらは貴族ではなく教会ご自慢の異端審問官なんだがな」

彼は今、会場となっているメノキアス王国王城の謁見の間から少しはなれた塔の屋根に座っていた。

彼には貴族達の動き方に無駄がなさすぎるのが見て解かった。それに彼らの眼のおくからは何の感情も伺えなかったのが決め手になった。

勇者シルファがどこかの王に勧め^{すす}られた酒のグラスを取り、飲もうとする。勇者の仲間だった女性の魔導師が止めに入るがもう後の祭りだ。

倒れ咳き込むシルファ。それを守る勇者の仲間達とそれを襲おうとする貴族に化けていた異端審問官達。各国の王は近衛に守られながら退出した。

「なかなか面白くなってきたな」

彼は懐から一冊の本を取り出す。それは別の世界で拾った怪物を呼び出すための魔書だった。

「召喚、『ナイトゴースト夜の魍魎』」

顔が無くコウモリの翼、長い尻尾、黒い皮膚をもつ人型の化け物が三体召喚された。

「勇者の敵を無力化しろ。後は好きにして良い」

三体の化け物は肩を震わせながら飛んでいく。

ナイトゴースト夜の魍魎は捕えた者を異次元に連れ去り、同盟関係の食屍人に食わせるのだ。

「オレの楽しみのために生き残れ、勇者」

どうやら無事に勇者は生き残ったらしい。ナイトゴースト夜の魍魎が間違いで勇者

の仲間の騎士を食屍人に食わせてしまったと弁明していたがたいした問題ではないだろう。

目の前に精魂尽き果てた風の勇者が倒れている。毒の酒を飲んでい
るのは分かるが体力の消耗がはげしすぎる。

魔道具で調べると勇者のほかに一つの魂があつた。

「ん？、勇者よ。貴様身籠っているのか」

どうやら勇者も人の子、旅の道中に子を授かったようだ。

彼は一つの楽しみのための名案を思いついた。

「勇者、オレと賭けをしないか？オレはもうこの世界に用は無い。
欲しい物は手に入れたからな」

これみよがしに先ほど手に入れた聖剣ベサルタを見せてやる。

「そこでだ。オレは六百年後、また一度この世界アルスギニア
に來訪する。それまで貴様の血統が絶えていないのならオレがアル
スギニアに平和をもたらそう。そのための前提として貴様と貴様の
子を助けてやる」

倒したはずの魔王の存在、奪われた聖剣ベサルタ、普通なら正常な
判断は下せない。

「分か、った……」

勇者は言った。

彼は自分の口の両端が吊り上るのを感じた。

「了承した。跳ぶぞ 失踪する影」
「ダークスピーダー」

追っ手の足音と怒声の鳴る森から二人は消えた。

とある村の入り口に一人の銀髪銀眼の女性が木によりかかるように眠っている。

それを彼が数秒見つめた後、村の反対に向かって歩き出した。

「あの容姿では迫害の的だ。だが、彼女の血は魔力が高い。うまく使えば成り上がる事もできるだろう」

わざと彼はそのような容姿にしてやった。

次に訪れる千年の間に血は絶える可能性は十分にありえる。

だが、何らかの方法で良い意味で有名になった時、名だけでなく顔も瞬くまに広まるだろう。彼はそれに賭けてみたのだ。

「六百年後が楽しみだ」

彼は世界を渡るために使っているナイフで虚空を切り裂き転移門ゲートを開いた。

第三話 冥府の宝玉

数多くある世界の一つアルスギニアのある丘の上で空間が波紋のようになびいた。それはつまり何者かが異世界からこちら世界に介入しようとしている証拠だった。

やがて波紋はくしゃりと黒い歪みとなり虚空に浮かぶ穴になった。

穴から一人の青年が出てくる。

「来てやったぞ。勇者」

彼は六百年前に勇者シルファに倒されたと良い伝えられている魔王だが今、この世界では見慣れない服を着ていた。

それが魔法が潰^{つぶ}え科学の発展した世界のダークスーツと呼ばれる礼服とは誰も解からないだろう。

「此処はどの辺りだ」

彼は辺りを見回すが視界にうつるのは生い茂った草木の生える丘だけで、その代わりに多くの人と動物の声、金属のこすれるのが混じった音が聞こえてきた。

どうやら少し離れた場所で人と動物が戦っているようだ。

彼は近くの巨木の幹^{みき}に飛び乗り聞こえた方角に視線を向ける。

「どこかの騎士団が湧いた魔物の群れを駆除しているようだな」

向こうの森の中の開けた場所で十数人程度の甲冑を身に着けた騎士がオークの群れと武器を交えている。

数は圧倒的にオークが勝っているが、戦闘技術については当然、騎士団が上だ。目に見えて魔物達は地に伏し息絶えていつている。

あんな雑魚では今の騎士の強さが判らない。

彼はあらゆる世界で手に入れた物を闇しかない小さな異空間に保管し自由に取り出せるようにしている。

「アーミー・オブ・ソロモン【大いなる王の指輪】、ヘルズゲート【冥府の宝玉】」

彼が口を動かすと黒い空間の歪みと共に指輪と水晶玉が出現した。

指輪は他の世界の古代遺跡から、水晶玉は彼がまた別の世界で「英雄」と呼ばれていた時に倒した悪魔から奪ったものだった。

どちらを使おうかと迷っていると不意に立っている幹の下から声がかかる。

「おい、そこで何をしている!」

顔を無けると三人の騎士が彼を仰ぎ見ていた。

「此処は現在、ルース王国騎士団が魔物討伐の任についッ

」

騎士の一人が喋るのを中断したのは舌を噛んでしまったとか、そんなマヌケな失敗のためではない。

自らの胸に一振りの剣が生えていたからだ。他の騎士の二人も同様

にして戦斧と槍が刺さっていた。

彼が異空間から適当に取り出した武器に指向性を持たせた極小、だが強力な爆発魔法を使って加速させ騎士三名を貫いたのだ。

しかも彼の持つ武器のほとんどが何らかの特殊能力を持っている。

突然、戦斧が刺さった方は火柱が立ち昇り黒焦げになって死に、槍の方は血液が水になって絶命した。

彼は幹から降りて大地に立つ。

すると剣を生やした騎士はちゃんと生きていた。……いや、手足の端から石化が始まっているから死ぬのも時間の問題だろう。

「……ッ貴様、何者だっ！」

剣に胸に貫かれ倒れながらも自分の剣帯に手を伸ばそうとする。なんと立派な騎士道精神だろうか。

「何者か。そういえば此処での名を決めていなかったな」

一度思考して騎士の名前を参考にしようと質問しかけて、やめた。騎士はすでに等身大の石像になっていたからだ。

この状態を人にみられるのが好ましくないからといって三人の騎士も大切な人生があったはずだと思い彼は少し反省したのは六百年のあいだに何かがあったからだろうか。

長いこと此処にはだめだと先ほど取り出した指輪と水晶玉を見ると水晶玉が紫色に変色しゆっくりと怪しく明滅している。

水晶玉は三人の騎士が死ぬのを感じてそれを生け贄だと判断したのだ。一言呪文を唱えればすぐに発動する。

（せめての罪滅ぼしに魔物はオレが殺してやるう）

「対象を魔物に限定。発動、『ゾンビカーニバル死者の狂乱』」

彼は仕上げに水晶玉を踏み潰すと水晶玉から放射状に紫色の波動が広がっていった。

「さあ、喰らい合え」

本件の異常事態についてルース王国騎士団第八番隊隊長クルトスは以下のように報告している。

クルトス隊長以下、数名の騎士が試験に合格し晴れて騎士候補生となった者達を連れて野営こみで比較的簡単に倒すことが可能なオークを相手にした実戦テストの際に起こった。

当初は順調に騎士候補生達がオークを倒していき生きている魔物と死んだ魔物の数が半分になったところ、突如あらわれた半透明の紫の波が一带を飲み込んだ。

「隊長、魔物供のようすが!!」

「……なんだあ騒々しい」

騎士候補生を見守っていたベテランの騎士の一人がクルトス隊長のいるテントに駆け込んできた。

「いいから来て下さい!大変なんです!!」

クルトス隊長はベテラン騎士の気迫にすこしだけ驚きながらもテントを出てベテラン騎士の背中を追った。

……彼は後にこう語っている。「地獄のようだった」と

死んだはずのオークの死体が生きているオークを襲っていたのだ。足や腕の無い者が血をまき散らしながら動いており、さらには頭のない胴だけのオークも走り回る始末。

これを地獄と呼ばずに何と呼ぶのか。

生きているオーク供は恐慌に陥り悲鳴を上げながら仲間であった死体を持っていた粗末な木の槍で振り払うが死体は立ち止まらない。口を開け齧^{かじ}り付く。(その間なぜか騎士達を襲おうとはしなかった)

少しして共喰いをはじめた生きている最後のオークが生きているオークになった時、死んだオークの群れは全て腐り土になって風に運ばれていった。

呆然と立ち尽くしていたクルトス隊長は股間が温かくなるのを感じ

ふと我にかえる。

周りにはあまりのおぞましい光景に食ったものを吐き出している騎士候補生達と自分と同じようにしている騎士の面々だけが残り今あったことが夢のようだったとクルトス隊長は報告書に付け足している。

なお、オークの漏れのこしがないか索敵にでていた三名の騎士が一人は焼死体、さらに一人が血を抜かれ代わりに真水を入れられ変死。もう一人は身体が完全に石化し剣帯に手を伸ばす状態で発見された。本件の異常事態の関連が懸念されている。

ルース王国騎士団団長ノルト・クレイセス・セントハースは報告書をめくる手を止める。

中肉中背だが鷹のような双眸と腰にある使い込まれた細身の長剣が彼の生きてきた歴史を物語っている。

「今回の件についてどう思われますか？」

前に立つ副団長フェルト・アリシア・ラルファールがノルトに質問する。

ここはルース王国の王都、ダルバート城にある団長専用の執務室。王都からオークと戦った森からはそれなりに距離があり異常事態から二日たっている。

「その場に居合わせた訳ではないから、何とも言えん。何を馬鹿なことを笑うこともできるがクルトス八番隊隊長は嘘をつくような人

物ではない」

実際、クルトス隊長達は王都帰還後体調不良ということで連日自宅で寝込んでいるようで騎士候補生の数人が発狂してしまい立ち直れない状態にある。

この死体が蘇^{よみが}えり共喰いをする異常事態は極秘案件としてに扱われ国王と騎士団の上位関係者、宰相、有力貴族の一部にしか知らされていない。

「もしや魔王が関係しているかもな」

「……魔王ですか……」

現在、東にいくつかの国をまたいだ先に魔族を統治する魔王の魔王領が展開しており、その魔王は六百年前、勇者シルファ・ファークスに倒されたものが復活したとも、新たに誕生したものだと噂されている。

現状を重くみたルーレス王国は七日後に異世界より勇者召喚の儀式を予定している。

ノルト騎士団長はそれを聞きつけた魔王が牽制^{けんせい}をしにきたと推測しているのだ。

「召喚の儀式の日程が縮むかも知れん……」

第四話 奴隸商人

呪文を唱えた後彼はそれからどうなったのかを見届けもせず、街に向かって歩き出した。

歩き出したといっても肝心な街の方角を知らないから適当に決めただけなのだ。

20分ほどしたころ草の生えていない一本道の街道に出た。馬車の車輪の跡が多いからけっこう使われているんだと推測する。

それからさらに街道を30分歩いていると後ろから大きな荷馬車が向かってくるのに気が付く。どこの世界でも豪勢なのが傲慢な貴族ほど立派な外観ではなくとも護衛を5人ほどつれているから商人の荷馬車だろう。

歩くのに飽きてきた頃だったから他の世界で身に着けた敬語で乗せてもらえるか頼むとしよう。

「すみません。乗せてくれませんか？」

馬を操っている御者に声をかける。

「金もっているか？私は商人だ。タダで乗せては名がすたる」

「残念ですが持ち合わせがありません」

そついった所で護衛の一人が近付いてきて御者に耳打ちした。

数秒話し合った最後に二人がオレをチラリと見たのを皮切りに御者は突然人のよさそうな笑みを浮かべて話しかけてきた。

「やっぱり乗ってくれ。後で私の根も葉もない噂を広められても困るからな」

「有り難うございます。街にいたらあなたがとても良い人だったと広めてみせましょう」

御者はそれに愛想笑いでこたえた。

まあ、内緒話の内容はオレの聴覚では丸聞こえだったのだがそれをして危ないのは商人側だ。黙っておこう。

「実はちょうど話相手が欲しかったんだ。かまわずに座ってくれ。」

御者が座っている広い御者台の一部をずれて空けてくれたのでそこに座る。もともとそれなりに大きいので気持ちの悪い構図にはならない。

「君、名前は何て言うんだい？」

街道を歩いている間に新しい名前を決めておいたので閉口することは無かった。

「はい、ギウンター。ギウンター・クロスベルと言います」

なんてことは無い。ある異世界で使っていた名をもじったものだ。

「ギウンター・クロスベルか。良い名だと思う」

心なしか護衛がオレを取り囲むようにってくる。

「ところで何処から来たんだ。目的はやっぱり勇者見物かい？」

「勇者見物？」

思わず聞き返してしまった。

「おや、知らなかったのか？東の方の魔王が動き出したみたいなんだがそれを国王が異世界から勇者を召喚することで対抗すると発表してね。百年ぶりなもんだから王都は勇者を一目みようと多くの人が集まってるんだ」

「百年ぶりということは前にもあつたんですか？」

「ああ、異世界の技術にあやかろうとしたみたいなんだが、召喚されたのはチキユウとか言う異世界の二ホンて国の少年で魔法がまだ認知されてない文化の低い世界だったから王族は落胆したんだとさ」

驚いた、オレが一つ前にいた世界がその地球だ。チキユウ

もしオレが百年早く来ていたのならその少年を還せたかもしれない。惜しいことをした。

「その異世界人はどうなったんですか？」

「早々に城から蹴り飛ばされたんだが頑張って働いて嫁をもらって孫に看取られて死んだらしいぞ。それなりに幸せだったんじゃないか」

先ほどから御者の言葉が馴れ馴れしくなってきた。そろそろ頃

合か。

「で、今回は潜在的に魔力の多い者を召喚するから大丈夫なんだが……、クロスベル、君常識を知らなさすぎないか？さすがにおかしいぞ」

オレは苦笑いをして

「それが……さっき森の中で目覚めまして記憶がないんです」

と言うと

「そうかそうかそれは残念だったな。よしこれも神のお導きだろう私が面倒をみてやる」

普通に考えれば都合の良いすぎる記憶喪失だと思うはずだが人間欲しいものが目の前にあると周りの事はどうでも良くなるらしい。

「さすがにずっとは無理だが

ジャキッ

横にいた護衛がオレの首筋に剣を当てる音だ。

「君が奴隷として売られるまででいいならこちらも大歓迎なんだが……、どうだい？」

やはりこうなるか。

護衛は山賊崩れの傭兵であの内緒話はオレを捕まえて奴隷にして売ろうとしての算段だった。

「知ってるか？この辺りでは私はそれなりに悪名の高い奴隷商人なんだよ」

御者の言葉にオレはこう返した。

「知ってるか？貴様らの命は今日ここまでだ」

剣を当てていた護衛の首が飛ぶ。

オレの右手には一振りの刀。左手には首のない護衛の持っていた剣。

「身の程知らずが。滅ぼしてやる」

左手の剣を投擲、二人めの護衛の眉間にめり込む。

「汝は地の精霊の加護を失う」

とつさに動こうとした護衛達の足が地に縫い付けられたかのように動かなくなる。この呪文はいくつもの世界で手に入れた技術を組み合わせ応用して作ったオリジナルの魔法だ。

勢いで転んでしまった三人めの首を斬りつけて殺す。

魔法の束縛を解いてやると四人めが突っこんでくる。そいつはその剣ごと斬り裂いて沈黙させた。

「な、なんだその切れ味！いったいどこでっ！？」

五人めは剣を構えて距離を置いたままだ。

「これは日本刀といってな、この世界には無い製法で造られた刀だ。それよりいいのか？距離を置いて糞の役にも立たんぞ」

五人めは冷や汗をたらずがそれでも動かない。

「断頭台に跪く彼女は何を思う」

五人めは斬られもせずに身体中を切り刻まれて死んだ。

オレは御者に向き直る。

「これも神のお導きか？」

刀を鼻面に突きつけると

「頼む、命だけは……」

御者は額を土で汚した。

「ここに来て命乞いとは恐れ入る」

「ま、待つてく」

御者の血が大地を赤く染め首はオレの足元まで転がり視線が交差した。

人は首だけの状態でも数秒生きているとされるが御者は何を思いながらオレを視たのだろうか。

荷馬車の幌をめくると奴隷にされた人間が押し込められ汗と糞尿の混じった臭いが鼻を突いた。

「彼らは従い反抗する自由を得た」

奴隷達の手枷足枷が小気味よい音と共に外れる。逃げたいのなら勝手に逃げろと言いついて残してオレは暴れている荷馬車の馬をいさめ準備にあつた鞍をつけて乗った。

「街の方角はこっちだったな」

正確には王都だろうがオレは街道に馬を走らせた。

第五話 勇者シルファの子孫の行方

元魔王 彼、ギウンター・クロスベルはダークスーツから墨色のフロックコートに着替えている。

あの荷馬車から馬の鞍をとって来た時に見つけたのだ。ついでの通貨だろうか、銅や銀でできたコインも回収して置いた。

半日馬に乗って過ごしていると街を囲う城壁が見えてきた。此処からでも分かる荘厳な城がある事からあれが王都のようだ。だが今は夕方、距離だとさらに半日かかるので深夜になるころに着くだろう。

王都が見える少し前からにちらほらと人が街道を往来するようになってる。

どうやら『勇者見物』が目的のようだ。

「おい、鹿がいるぜ」

林の陰から鹿がひょこつと顔だけだしてこちらを見つめている。

「そう言えば腹が減ったな」

「はい、背中がくつつきそうです」

オレが話しているのは途中で知り合ったサウロと名乗る青年だ。ちなみに「おい、鹿がいるぜ」と言ったのがサウロだ。

「そろそろ野宿の準備をしねえとな」

「このまま王都に入らないんですか？」

「おいおい、検問は夜には閉まってるんだから入れる訳ねえだろ」

確かにそうだ。地球ではそんな物は無きに等しかったし似た世界でも魔法を使つて出入りしていたから忘れてしまっていた。

「田舎から出てきた者なので良く分からないんです。すみません」

「そうだったか……。ん、あつちで誰かが火を焚いてるな。俺達もあやかろうぜ」

サウが前方を指差すと街道の外れで何人かが焚き火をしている。オレとサウロは馬を進めた。

近付いていくと焚き火をしていたのは行商人の一団で焚き火を囲い談笑しながらして夕食をとっていた。

「やあ、行商人の皆さん儲かってるかい？」

サウロが片手を上げて話しかける。

「いや、これから稼ぎに行く所さ」

行商人の一人が停めてある荷馬車を指し示す。

「もしかして『勇者見物』に来た人達目当てですか」

オレも遅れて話しかける。

「はは、手厳しいね。そうだよ。俺らにとつちや勇者は“金の成る木”ってとこさ」

行商人は頭を掻いて笑った。

「それよりそんなとこに突っ立ってないでこっちにきなよ」

干し肉を食んでいたもう一人の行商人が手招きする。

「すまねえな」

サウロがいそいそと焚き火の前に座った。最初からこれが目的だったな。

「失礼させてもらいます」

「で、こんな塩の効いてない干し肉だけじゃ明日身体が持たないぞ」

「仕方ないだろ。俺らじゃ動物は捕まえないんだから」

オレ達が来る前までは夕食の文句を話していたらしい。

「儂なら大抵の動物を捌くことができるんじやが…」

一番歳をとっていそうな行商人が顎鬚を触っている。

殺した奴隷商人とは正反対に面白い人達のような。ここはオレも人

肌脱いでやるとしよう。

「なんならオレが捕ってきてあげましょうか？」

全員が驚いた顔をする。

当たり前といえば当たり前。オレの服装はフロックコートと言う運動とは完全に不向きな礼装なのだ

。驚くのは無理もない。

「こりゃあ良い！あんたみたいな虫も殺せないような格好した奴が狩りをするとは。面白い、皆こいつがちゃんと捕まえてくるか賭けしねえか！？」

酒をあおっていた一人が声を大きくして笑う。他の行商人達も「俺はなしに銅貨五枚！」などと面白がっている。

「おい、ギョントー、ほんとに大丈夫か？」

サウロが心配そうに声をかけてきた。

「問題ないですよ。安心してください」

オレが自信に満ちた表情で返してやるとサウロは「そうか…」と言っ
て引き下がった。

街道から離れ隣接する林の奥に入ると急に人氣が消え失せ変わって

動物、または魔物の気配が高まっていた。

「雷神は大地を駆け巡る」

オレの足から放射状に高圧電流が放たれ地面を奔っていくと少し離れた場所から生き物の悲鳴が聞こえた。

確認すると鹿だった。もしかするとあの時こちらを見つめていた鹿かもしれない。

その鹿も身体を痙攣させビクビクと震えている。けっこうな人数がいたからもつと必要だろう。

同じ要領で動物を何頭か捕まえていく。

だいぶ日が暮れる頃になると結果は鹿二頭に兎四羽だった。

引き摺って運んでいくと皆果然としていた。

その後、「大損だー！ー！」と嘆く者や大穴を狙っていた者が「有り難う」と涙を滲ませて握手をしてきたのはご愛嬌だろう。

結局、焚き火はキャンプファイヤー並の火力にして鹿と兎をそのまま焼肉にして食べた。月が真上にくる時間までおおいに騒ぎ疲れ果て、皆が寝静まった頃、オレは余興の賭けに負けた代償に寝ずの番をして火をみていた。

この世界で魔王をしていた時、軍勢は全て使い魔や召喚獣ばかりだ

った。酔狂な魔族の何人かはいたが面白みのない奴ばかりだった。勇者シルファの子孫が見つかるまで極力は力を使わずに旅をするのも良いかもしれない。

そんなとこまで考えが及んでいると、人の気配がして慌て振り返るとサウロだった。

「寝ずの番ご苦労さん」

「あはは、交代の時間ですか？」

サウロも賭けに負けていたはず。サウロはやれやれと肩を竦めた。

「なあ、勇者つてどんな奴だと思っ？」

オレは薪を焚き火にくべるとパチツと他の薪が爆ぜ火の粉が舞う。

「異世界ですからね。分かるはずも無いですよ」

数え切れ無い程異世界を転々として旅していると不運にも次元の狭間に迷い込んだ異世界人や転生者、召喚者に会ってきたが言っても信じてはもらえないだろう

「今回、勇者を召喚するのは第二王女様らしいんだがよ、これがベツピンらしくて銀髪銀眼がよく似合ってるらしいぜ」

銀髪銀眼だと！？

「ぎ、銀髪銀眼！？」

「…そうかおまえ田舎の出だったな。ルース王国の王族は全員銀の髪に銀の瞳を持つそうだ」

寝ていた誰かが寝返りをうった音が聞こえる。

この世界に銀髪銀眼はいなかった。唯一オレが勇者シルファの血に
【虚構の自画像】オーダーメイド でつけた呪い以外には……。

「…それはぜひ見てみたいですね」

「そうだろー。チャンスがあるなら俺も拝んでみたいぜ」

そうやってサウロと話していくうちに夜は明けていった。

第五話 勇者シルファの子孫の行方（後書き）

皆さん初めまして。

作者です。

今回こんな作品に感想とお気に入り登録をしてくださった方がいます。

この場で感謝の意を表したいと思います
有り難うございました！！

第六話 宿屋

オレ達は今、とつくに夜が明けて王都に向け馬に乗っている。
街道から見える景色は青々とした森から背の低い草の生えた平地になっ
ていた。

「そう言えばサウロさんは何をしに王都へ来たんですか？」

「勇者召喚とほとんど平行して騎士団入団試験があるんだが、優秀
者は候補生通り越して即戦力で騎士にするらしいんだ。そいつが理
由さ」

サウロは遠くの者を見るような目をしながら言った。どうやら英雄
として称えられている自分の未来の姿が映っているようだ。

「頑張ってください。応援してます」

「おう、頼むぜ」

嬉しかったのか破顔しながら軽くオレの肩を叩いた。

「……それと、おまえこそ何しに来たんだよ？」

「……そうですね……。あえて言うなら古い約束を果たしに来たつ
処ですかね」

六百年前、勇者シルファにした世界を平和にしてやるという約束。その前提としてのシルファの子孫は生きていたし国を治める程にまで為っていた。ここで反故にすれば遊びだったとは言え、名が廃るものだ。

「古い約束ねえ。複雑そうだな」

「いえ、全面的に悪かったのはオレですから。情で提案したのを彼女が吞んで、それが叶ったから果たしに行くんです」

「彼女だつて！ 女か！？」

「はいそうです。でも歳の差はかなりありますし、あつちはオレを嫌ってましたから期待するような事は……」

「分かんねえぞぉ。おまえ鈍そうだし嫌よ嫌よも好きの内って言うくらいだからな」

曲がりなりにも魔王を名乗っていたオレと救世の旗を掲げた勇者が色恋沙汰とはどこの世界でも聞いたこともない。

オレはそれに乾いた笑いで答えるしかなかった。
いや、確か他の異世界であつたぞ。そんな笑えない話。

「通行料に銀貨一枚だ」

正午、王都の一軒家くらいの巨大な鋼鉄製の南正門に設置してある検問に着くと騎士の一人が近付いてきた。

「馬がこれ以降不要な場合は引き取らせて貰うがどうする？」

「じゃあ、お願いします」

オレは殺した奴隷商人から奪った金かねの入った皮袋を弄りながら言った。検問はかなり混雑し人の洪水のような状態だった。

「おいおい良いのか？」

サウロが馬から降りて手綱をひっぱりながら聞いてくる。

この世界では銅貨十枚で銀貨一枚。銀貨十枚で金貨一枚という数え方で平民が謹んで生活一ヶ月金貨一枚で成り立っているらしい。(これはサウロに聞いたことだがどれだけ田舎者なんだよと笑われた)

「はい、まだ金には困っていませんし馬はもう必要ないと思うので」

「ではそのように……」

騎士がオレの乗っていた馬は連れて行こうとした時、もう一人の騎士が小走りに走ってきた。

「おい、実戦テストに行っていた八番隊が帰ってきたぞ！」

息が荒く慌てているようだ。

「公務中だ。私語は慎め」

最初の騎士が慄然とした顔をしながら指摘した。

「それがどうも変なんだ。ナイルも手伝ってくれ」

そう行つてその騎士は走つてきた場所に戻っていく。

ナイルと呼ばれた騎士も少ししてオレ達がいた事を思い出し「行つてよし」と言つと馬を連れて去つていった。

「騒々しいな。なんかあつたのか？」

「どうでしょうね……」

オレはもう一人の騎士が来た方に目を向けると「ああ、成る程な」と心中で呟いた。

向こうに見えるやつれた顔の騎士の一人は昨日オレがこの世界に到着した時に離れた場所でオークと戦っていた連中だった。どうせ【ヘルズゲート冥府の宝玉】で甦つたオークの死体を間も当たりにしたのだろう。

「オレ達には関係ないようですし行きましょう」

「そうだな後ろもつかつてきてるしそろそろ行くか」

オレは口を手で抑え誰にも分からないよう笑いを隠しながら門をくぐった。

「短い間だったが楽しかったぜ。ありがとな」

「こちらこそいい思い出になりました。お元気で」

ここで彼ともお別れだ。これからの行動は一人の方が楽であろうし、それはサウロも同じなので自然とそうなった。

最後に「またどこかで…」と言って軽い握手を交わして各々の道を進んでいった。

王都には到着したのだ。まずは情報収集からだろう。

小さな噴水広場の横にある宿屋に決めて入ろうとすると隅にネズミが落ちたパンを我が物顔で齧っているのを見つけた。

数秒見つめているとネズミは「急用を思い出した!!」という感じで大切な栄養源たるパンを置いて隠れてしまった。

オレも休むために宿屋のドアを開くと小気味よい来客を告げる鈴が鳴った。

「いらっしゃいませ。お泊りですか？それともお食事ですか？」

数秒後、ウェイトレスのような服を着た少女が声を掛けてくる。宿屋は家族経営で二階建て、一階は食堂、二階は宿泊用になっているらしい。

「泊まりです。とりあえずこの額で」

皮袋から適当に銀貨を出す。それを少女が「ひーふーみー…」と数えていく。しぐさが可愛いので立派な看板娘だろう。食堂の客

も多いしとても繁盛しているようだ。

「この額ならお食事つきで二週間お泊りになれますがどうなさいますか？」

「ではそれをお願いします」

「分かりました。こちらにどうぞ」

少女が二階に上がっていきオレもその後を付いて行つた。

オレに与えられた部屋は当然個室で木のイスと机、それに普通のベッド。普通の宿屋なので期待はしていなかったのでそんなものだ。泊より食の味、といった感じのようだ。

「それではごゆっくりどうぞ」

につこりと笑う少女にオレは「ありがとう」と言つて与えられた部屋に入るとドアを閉めて鍵をかける。

「出て来い」

ベッドに座りながら一言そう言つとぞろぞろと何処からネズミの群れが姿を現した。オレは先ほど宿屋の前にいたネズミに魔法をかけ仲間を集めてくるよう命じたのだ。

「神は全てを知るための目と耳を持つ」

この呪文でこのネズミの集団はオレの配下となり五感がリンクした状態になった。これでネズミ共の視界や聴覚を横取りして動かずに

情報収集ができる。

「貴様らは王城に潜入し勇者召喚と王族の動向を探れ」

ネズミの集団は皆一様に頷く。

「では、散れ」

ネズミ共はそれぞれが主人の命令に応えるために王城に向けて駆け去って行った。

第七話 魔方陣

ネズミ共を使い魔として王城に向かわせた後、オレは夕食をとりその日はそのまま寝た。

そして気付けば朝、爽やかな日差しと小うるさい鶏の声と共に目を覚ました。

「あ、おはようございます！」

部屋を出て階段をおりると宿屋の看板娘の少女が笑顔で挨拶をしてきた。

「おはようございます。朝食をお願いしますか？」

「もちろんです！少しの間お待ちください」

一階は食堂なのでその辺のテーブルのイスに座りしばし待っていると朝食が運ばれてきた。

サラダに目玉焼き、パンにスープと何の変哲も無い料理だったが味は中々だった。主人の奴、中々やるな。

パンをかじっていると厨房の方から話し声が聞こえてきた。話しているのは看板娘の少女とその母と父らしい。

「お父さん、昨日ネズミを見かけなかったね」

「言われてみれば残飯を捨てに行く時にいなかったな」

「地揺れが起きる時には動物が隠れるってパン屋のイアンが言ってたけど……」

「そんな訳ないでしょ。それよりニーナ、お母さんあなたがこっそりネズミにパンをやってるの知ってるんですからね」

「げっ、ばれちゃってましたか……」

「げっ、じゃないの！不衛生でしょ」

あの少女、ニーナというらしく優しさからネズミに餌をやっていたようだ。

ちょうど全て食べ終わり口直しに水も飲み終わったので「ご馳走さまです」と伝えるとこれ幸いとばかりにニーナが厨房から逃げてきた。

「ニーナちゃん、優しいのは良いけどご両親を困らせてはいけませんよ」

ニーナはオレを見た後、頬を朱に染めて俯きながら「はい……」と返した。話を聞かれたのを恥ずかしがっているのだろうか。

オレは数年もすればひく手数多だろうなと思案しながらニーナが食器を片付けるのを見届けてから部屋に戻った。

「例のネズミ共は王城に潜入したかな」

ベッドに座り意識を集中させ現在潜入したネズミの位置情報を確かめる。

（…大方は成功しているようだな）

適当に半自動状態で操っていたので途中でネコに襲われたり王城のメイド達によって追い出されたものもいた。

『の件についてど……われますか？』

成功した一匹が盗聴している。まずはそこに意識を向けてみるとするか。

『何とも言えん。何を馬鹿なことを笑うこともできるがクルトス八番隊隊長は嘘をつくような人物ではない』

会話の主は男と女の二人のようだ。身なりから軍事に携わる者らしかった。

（八番隊…どこかで聞いたな。ああ、オレが代わりにオークを殺してやった連中か）

『もしか魔王が関係しているかもな』

『……魔王ですか……』

男の考えは間違っではない。唯、「魔王」の前に“元”がつくだけだ。

『召喚の儀式の日程が縮むかも知れん…』

召喚の儀式と言うのは間違いなく「勇者召喚」のことだろう。

（予定日が近くなるとは……、先に召喚のための「魔方陣」でも確認しておくか）

大規模な異世界からの召喚ならばオレの持つ魔道具がなければ精霊や外気の魔力、複数の魔導師の力を使うためにそれなりの設備、「魔方陣」が必須になる。

いかなる者がどのような能力を持って召喚されるのかはその「魔方陣」が決定するのだ。

意識を怪しげな場所にいるネズミに移す。

（地下から魔力の流れを感じるな）

地下へと続く階段をネズミに降りさせ石畳の廊下を進ませていくと鋼鉄でできた扉にぶつかった。

（この先に「魔方陣」があるようだな）

とうていネズミの力で門を開けるこおは不可能なので抜け穴がないか周りを探ると扉と壁の間に小さな隙間があった。

ネズミに隙間を潜らせた先には確かに魔法言語で書かれた文字に幾何学模様で描かれ円で全てが結ばれて完成された魔法陣があった。

（ふむ、完全対話、読解の魔法に魔力増強、体力増加……まだまだ

あるな)

これ程の魔法を半永久的に掛けられた状態ならば唯でさえ“勇者たる器”のある召喚者がされに強さを増して召喚されるだろう。

(ん？この座標は)

魔方阵には世界によっては負荷処理のために召喚者を絞り込み安くするために召喚者を選別させる世界を決められる場合がある。

(チキユウ ニホン 地球の日本だと！)

偶然そうなったのか、それとも目的があつてそうしたのかは解からない。だが世界を絞ることである者を選びにくくなってくるのにこれではさらに絞り込まれ「世界」ではなく「国」の中から探さなくてはいけない。

作り直し、少なくとも地球から探せるように出来なければとネズミに近寄らせようとした時、それに似合つた重々しい音と共に扉が開いた。

「第二王女様にはここで召喚の儀式を行つてもらいます」

「分かりました」

「……………」

入ってきたのは二人の騎士と無表情の少女、それに銀髪銀眼の容貌に純白のドレスを身に着けた無表情少女と同年代そうな女性だった。

（あれが今回勇者を召喚する第二王女か）

六百年前の勇者シルファに似ている。見れば見るほどそう思えてしまふ容姿だった。

ふと視線を感じそこにネズミの顔を向けると無表情少女と目があつた。

「使い魔」

「は？」

突然の無表情少女の呟きに騎士の一人が反応した。

「…あのネズミ、誰かが放った使い魔」

「何だと!!」

騎士二人がオレが操っていたネズミを掴みにかかる。その手から逃げようとネズミは駆け回るが結局は捕まってしまった。

「どうでしょう!？」

第二王女が慌てながら無表情少女に問いかける。

「…逆探知してみる」

（クソが…!）

オレの力ならやろうと思えば逆に無表情少女を呪い殺せるだろう。

だがこの少女は恐らく「勇者」の仲間になるであろう人物だ。殺す訳にはいかない。

（リンク切断）

そう念じるとネズミとの五感のリンクが切られ自分の意識が身体に戻ってくる。

「中級クラスの魔導師ならば気付けない程に注意していた…。ならばあの無表情少女はそれ以上という事か」

部屋の窓から空を仰ぐと太陽は真上にさしかかり正午を告げていた。

「…逆探知、失敗した」

ルース王国が誇る最年少の大魔導師ユーリ・エディナがため息をつくように棒読みの声をだした。

「いつたい誰がこんな事を」

第二王女アリス・エディア・ルースは首を傾げる。

騎士の一人がネズミを外に逃がしに、もう一人は騎士団長ノルトに報告しに行っている間アリスとユーリは考える。

「…魔王の線が妥当」

「かもしれない、でも即断はダメ。ちゃんと考えなきゃ」

「……………」

そこで騎士団長に報告に行った一人が戻ってきた。

「ノルト様は儀式場を一時封鎖、城内の警備を厳にすることです」

「分かりました。私も父上に話しておきます」

騎士は敬礼しアリスの護衛をユーリに任せる旨を伝えると駆け足に去っていった。

「勇者召喚の日にちが早まるのは確かそうですね」

「…はい」

第八話 過去（前書き）

明けましておめでとございます……一日遅いですが。

第八話 過去

部屋の窓から空を仰ぐと太陽は真上にさしかかり正午を告げていた。思っていたより長い時間、意識を集中していたらしい。

昼食かと部屋を出、食堂に降りる。

「ご注文は何になさいますか？」

なぜか看板娘のニーナではなくその父であり厨房にいるはずの主人が声を掛けてくる。

「ああ、嫁がいきなり倒れてね。娘が看病しにいつてるんだよ」

オレの疑問にいち早く気付いた主人がさきに喋った。

「そうですか、忙しそうですし外で食べてきましょう」

「悪いね。その分の代金はあとで返すよ」

「いえいえ、それと図書館はどこにありますか？」

「図書館か、それなら王城のそばに王立図書館があるからそこに行くといいよ」

礼を言ってオレは宿屋から街に足をのばした。

なぜ図書館なのかと言うと勇者シルファとその祖先がどうやって一
国を治めるまでになったか知れたかったからだ。

王城は王都の外からでも分かるその荘厳さと巨大さが有名なのです
ぐに判った。

ひとまず食事だ。世界を旅する内にその食文化がどう進んでいる
かも昔から興味があった。

「あれは何だ」

道の隅の露店の中に串焼きのような物を売っている店があった。

「いらっしやい、どれもうまいぞ」

「店主、これはトカゲか？」

「東の魔の森にいるレッドリザードの子供さ。うまいから騙された
と思って食ってみな、金是要らん」

店主が口から尻まで串で貫通された惨殺死体を差し出してくる。

「有りがたく頂こう」

トカゲの脇腹にかぶりついてみる。

「…以外に旨いな、三つほど買おう」

「ありがてえ、気味悪くて誰も買っていかねえんだよ」

代金を払いトカゲの串焼きを三つもらう。

一度、この世界より原始的な世界でイモムシを生で食べたことがあったがあれで大抵の物は食えるようになった。……あれは不味かったな。

串焼きを頬張りながら王城に向かって歩いていく。

途中、『魔欠病に気をつけて!!』なる張り紙があったがどんな病気なのだろうか。

王城と目と鼻の先まで来た。

ハルバートを手にした騎士達が門を固めている。それなりの剣士でも突破は難しいだろう。

王城の近くに博識の神とその信徒の彫刻がなされ窓のいくつかは珍しいステンドグラスのはめ込まれた絢爛な建物が建っており、扉の前に『ルーレス王国王立図書館』と看板に書かれてあった。

図書館に入ると常人の背丈の二倍はあるような本棚がいくつも並び、それが二階、三階、四階へと続いていく。いったい、どれ程の本が納められているのか見当もつかない。

「どのような書物をお探しですか？」

「歴史と…伝説に関する本を探しているのですが……」

「三階の左端から六番目までの本棚になります」

司書に聞くとすぐに返答が返ってきたが歴史と伝説だけで六もの本棚にあるとは驚きた。

並べられた本の背表紙をなぞりながら目当ての本を探し出す。

「…あつた、これのようだな」

手近のイスに座りもう一度題名を確認する。別に事細かな所まで知る必要はないので物語風のものにしてみた。

見つけた二冊の本の題名は『勇者シルファの伝説』と『ルース王国建国まで』。

先に『勇者シルファの偉業』を読んでみるか。

勇者シルファ・ファークスは世界征服を狙った魔王を討伐した聖女である。

彼女は仲間達と共に瞬く間に魔王の軍勢とその四天王を打ち滅ぼし遂に……

当事者なら知っていて当たり前の事が笑える程の脚色が加えられ伝えられていた。

「六百年もあれば脚色くらいはさせられるか…」

特に面白いのは魔王を名乗っていたオレが倒される場面である。

三日三晩の死闘の果てにシルファの聖剣ベサルタが魔王の胸を貫きオレが「覚えているオ、この借りはいつか必ず」と呪詛の念を吐き聖剣の呪いに苦しみながら死んでいくのだが実際は……

この世界も潮時かと思いわざと斬りつけられたオレが「その騎士とお幸せに」と言つて魔王討伐の成功を歓喜する勇者らをほくそ笑みながら狸寝入りをしていたのが真実である。

オレはパラパラとページを捲り最終章に入った。

最後は祝いの席で勇者シルファは「私の役割は終わった」と告げその後、彼女は見た者はいなかった、と綴られて終わっていた。

これは暗殺に失敗した『教会』が捏造して作った箇所だろう。

「勇者が読んだらどんな顔をするのか分からないのが残念だ」

次に『ルース王国建国まで』は目次に一章から十五章まで書かれた鈍器のようなその本の冒頭のサブタイトルは「銀髪銀眼の聖女」となっていた。

魔王討伐の知らせが行き渡る少し前、田舎のエオルという村の入り口で身ごもった状態の銀髪銀眼の女性が発見される事から物語は始まる。

最初こそその容姿からのけ者にされていたがある日、村に盗賊が襲ってくるがその女性と息子が高位の魔法で盗賊を撃退し聖女として祭り上げられる。

噂は尾ヒレをつけながら回っていき遂には地方の領主までに届き召し抱えられることになった。

そのこの私兵として数代流れていくが他国との戦争となった折、多大な戦果を挙げ騎士団入隊が条件で貴族となる。それが五百五十年前。

それから五十年後、時折武功を立て上級貴族にまで上りつめた女性のひひ孫は王女の専属近衛騎士となる（本の一章分が王女との初々しい恋の短編に割かれていた）。

また二百年の間国の老舗の貴族として活躍するが王の崩御をきっかけに内乱が勃発。内乱は五十年続くが今のルース王国国王一世に当たる人物が統一を果たした。

そして三百年経つ今、ルース王国国王六代目ジルベルト・イグレイブ・ルースがルース王国を統治しているのだ。

「頭痛がひどいな……」

読み応えのある長編に目の奥が痛くなってきた。だがその理由は本だけでなく一つの不安もあった。

魔方陣をあのまま使用すれば必ず地球の日本の誰かが召喚される。最高の“器”を持つ者が呼ばれるだろうが、それを一日本（国）ではなく少なくとも一地球（世界）に視野を広げられればさらに上の器を探せるはずだ。

「今日は警備が厳しいはず……夜は逆にさらに厳しくなるだろう」
立ち上がるとイスがギイイと耳障りな音を立てた。

「
ならば明日の昼ごろにでも」

開け放たれた窓から沈みかかった夕日が一望できた。

王城の一室は重苦しい空気に包まれていた。

中央には円卓が置かれ周りを複数のイスがぐるりと取り囲んでいた。

「アータル、魔導師の準備はできているのだろうか？」

「はい、国王陛下。選抜した魔導師九人全て整っております」

ルース王国騎士団魔法部隊隊長アータルは首肯した。

「ならば問題はあるまい。元々召喚の儀式は余裕をもって先延ばしにしていたのだからな」

先ほど問いを投げたのはこの国を治めている国王ジルベルト・イグレブ・ルースその人である。

「はい、陛下の許可があれば今すぐにも行えます」

「待て、今日はさすがに拙い^{ます}。唯でさえ兵があ^ゐの事で浮き足立っているんだぞ」

口を挟んだのは騎士団長ノルトである。今、この会議室では国王、第二王女アリス、大魔導師ユーリ、騎士団長ノルト、魔法部隊隊長アータルが集まり“勇者召喚の前倒し”について検討していた。

「いったい、誰がオークのアンデット化を想像できましょう」

アンデット……つまり起き上がりは洞窟や魔力のこもりがちな森の深奥では冒険者や騎士がスケルトンファイター等と種別される魔物となることかしばしばあるが一昨日に起こった事件は丘でオークがそうだったのである。当然、これはルーレス王国どころか各国でも報告されていない。

「アリス様、あなたは私の部下達をお疑いなさるのか？」

怒気こそ孕んではないがノルト騎士団長の声音には不満がありありと含まれていた。

「諫めるのだ、ノルトよ。お主こそ半信半疑なのではないのか？」

ジルベルト国王が顎を撫でながらノルトを下知する。

「申し訳ありません。陛下」

「…使い魔は、本当……」

初めてユーリが呟くように喋った。

「双方の言い分は良く解かっているのだ。そのためにお主らをここに集めたのだからな」

「父上、私はいつでもやれます」

勇者召喚ではアリスが召喚の呪文を唱えることになっていた。

「うむ、準備は全てとうの昔に整っているのだ。ならば明日の昼でも文句はあるまい」

なぜ昼なのかと言うのは召喚された勇者が夜通しこの世界についての説明をなさねばなくなるような無礼を避けるための配慮のためである。

ジルベルトの問いに全員は頷いた。

第九話 勇者召喚

図書館から宿屋に帰るとやはり主人しか居らず「すまない、また外で食べてきてくれないか」と言われ露店の屋台で食べ歩きをして終わった。

朝、ベッドの布団をまくり部屋を出る。今日は王城に忍び込んで魔方阵を作り直しておかなければならない。告知では勇者召喚は五日後になっているので十分に間に合うだろう。

「……………」

昨日は主人が一階の食堂にいたのだが今日は主人どこか客一人いないではないか。

不思議に思っていると外から喧騒めいた声が聞こえてきた。

宿屋の前は噴水のある小さな広場になっているのだがその側で主人が膝を突いて泣き崩れ、近隣の住民らしき人物達が集まって相談をしている。

外に出るとオレに気付いた住民の一人が走ってきた。

「君、あいつの娘の行方を知らないか!？」

娘とは看板娘のニーナのことだ。

「どうしたんですか、そんなに慌てて」

「あいつの嫁が倒れたのは知ってるだろう」

昨日はそれで忙しそうだから外で食べ歩きをしたのだ。

「ありゃあ、魔欠病っていう病気だったんだよ」

「魔欠病？なんですかそれは？」

昨日、図書館へ行くすがら『魔欠病に気をつけて！！』とか書いてあった張り紙があつたなど、ふと思ひ出した。

「知らないのか？なら簡潔に教えてやろう。あれは……」

聞くところによると、魔欠病なる病は読んで字のごとく体内の魔力が枯渇する病気らしい。感染症ではなくかなり珍しい病気のため薬はめつたに作られていないようだった。

「……症状はほとんどなくて死亡率はその癪、三分の一。大変な病気で町医者は夜が峠だつてよ」

「事情は分かりました。ですが、ニーナちゃんがないのとは何の関係が？」

そこで「おーい！！」と広場に向かってくる二つの人影。小麦粉にまみれた格好からパン屋の主人とその弟子と推測する。

「こいつがニーナちゃんは、魔の森に行ったんじゃないかってよお！」

パン屋の主人が弟子の襟首を引っ張り住人達の前にだした。よく見ると頭の一部分が腫れ上がっている。きつと主人の拳骨が落ちたのだろう。

「魔の森だつてえ！」

おばさんが悲鳴じみた声をあげた。

「魔の森というのは……」

「魔の森ってのは王都からちよいと東に行った所にある魔物の多く棲む森だよ」

「イアン、なんでニーナちゃんがそんなとこに行かなきゃいけないんだ!？」

「僕、この前お客の冒険者の人に魔の森には魔欠病に効く薬草があるって聞いたんだ。それで……」

成る程。だいたいの事情は分かった。

これも何かの縁だ、死んでもらっては寝覚めが悪い。

急ぐべきは森に入ったであろうニーナを助けることにある。母親の方はその薬草が無くともオレの持つ薬の一つでどうにでもなるはずだ。

「おい、今魔の森はゴブリンが多かったんじゃないか？」

「確か冒険者ギルドに依頼が……って、おい君どこへ行く!？」

オレは東にある魔の森に向け疾走する。

人目の無い場所を本気で全力疾走で行けばすぐにたどりつくはず。

眼前に王都の城壁がせまってくると軽々とジャンプして飛び越えた。
(偶然、城壁を見回っていた兵士と目が合った)

盛大に着地して走り出しとすぐに暗い雰囲気魔の森が見えてくる。

片手をかざすと空間に黒い歪みが生じ同時にそこから召喚獣を呼び出す魔書が現出した。

「召喚、スカイアイ飛翔する眼球」

羽虫の羽を生やした一つ目の化け物が二十匹ほど現われる。

「森に迷い込んだ少女を探せ」

スカイアイ飛翔する眼球共は羽音を響かせ飛んでいき、オレも森に踏み込んだ。
地を踏みしめる度に落ちた枝の割れる音が鳴る。

「邪魔だ、どけ」

異空間から取り出した長剣で邪魔な木々や魔物を蹴散らしていくが
ニーナは見当たらない。場所を間違えたか。

『ゲツゲツゲツ...』

スカイアイ一匹の飛翔する眼球が戻ってきた。ニーナを見つけたらしい。
それに案内させさらに森を進んでいった。

ニーナは一際大きな大木の根元で怯えていた。

イアンから聞いた薬草は確かにそこにあった。

ニーナは喜んだ。

近くの草むらから六匹のゴブリンが現われるまでは

ゴブリンは雌が存在せず多種族の雌を代用して子孫を増やすことで有名である。

ニーナは旋律し、薬草をその手に握り締めながら逃げる、逃げる。

だが弱い少女と魔物の体力は比較するまでも無く、ニーナは疲れ果て大木の根元で転んでしまったのだ。

どこからやってきたのかゴブリンの数は三十匹にまで膨れ上がっている。

さらに中空には最初は虫かと思ったがよくよく見れば目玉に虫の羽のついた異形の魔物が飛んでいた。

「いやあ！止めて。来ないで！！」

ゴブリン達がいんまりと笑いながらすこしずつ近付いてくる。腕でぶんぶん追ひ払おうとするが何の効果も無い。逆に抵抗したことでゴブリン達を怒らせただけだった。

手斧を持ったゴブリンがニーナの腕を掴もうとしたその瞬間、遠くから飛来した一振りの剣が手斧ゴブリンの首を跳ね飛ばしその勢いのまま第二、第三のゴブリンへと致命傷を与えながら大地に突き刺さった。

「間に合ったか」

現われたのは最近ニーナの家族で経営している宿屋に泊まっていた青年だった。

「大丈夫かい、ニーナちゃん」

ゴブリン達が言葉ならぬ言葉で騒ぎ始めるなか、青年はニーナに手を差し伸べる。

ニーナには青年が自分を窮地から救いに來た白馬の王子にも思えた。

「あつ、はい…………え、あ、その…………」

ニーナは今頃になって思い出した。自分が青年の名を知らないことに。

「ギューンター・クロスベルだ」

「クロスベルさん、助けてもらって」

ギンターはニーナの言葉を手で遮り制止させる。

「感謝の礼は後でいい。まずはここを切り抜けないと」

ギンターの手には新たに曲刀が握られていた。

そこからは一方的な反撃だった。

襲った者から奪ったであろう武器を振りかざすゴブリン達は滑るようにして曲刀を振るうギンターに為す術も無く切り伏せられていった。

「ちよつと失礼」

ゴブリン達の数が大分減ったところで、いきなりギンターはニーナを抱え上げた。いわゆるお姫様だったこというやつである。

「え、あつ…」

こんな場面なのにニーナは赤面してしまう。

「スピード出すから目をつぶった方が良い」

ニーナが目をつぶると風を切る音が耳に入りギンターが走っているのだと理解した。それでもかなり早い。一度乗ったことのある馬よりも早いのではないだろうか。

その状態がしばらく続くと風の音は少しずつ止み停止したのだと解かった。

「もう開けてもいいよ」

ニーナが目を開いた時にはもう王都の城壁の側だった。

「王都の外に出る時は検問を通るはずだけどどうやって抜けられたんだい？」

お姫様だつこが解除されニーナの足が土を踏んだ。（ちょっとお姫様だつこを続けて欲しかったのは内緒だ）

「昔、見つけたんです。城壁のブロック石の一つがはずせる事に」

ニーナが一つの石のブロックを押すといとも簡単に動き大人がほふく前進で通れるくらいの穴が開いた。

「成る程、ここを通ってきたのか。オレはこれから用事があるから行かないといけないんだが一人で大丈夫？」

「はい、助けてもらってありがとうございます」

本当はずつといて欲しかったのだが命の恩人に無理は言えない。

「じゃあ、オレは行くよ」

ギョンターは穴を通ってまた走り出した。

「アリス様、準備はよろしいですか？」

第二王女アリスは凄腕の魔導師九人と多くの騎士に見守られながら詠唱を開始した。

場所は王城の地下にある勇者召喚のための儀式場で床には特大の魔方阵が描かれている。

アリスが勇者を呼ぶための目印として詠唱し魔導師九人は詠唱しながらも魔方阵に魔力を流し込み活性化させるのが今回の勇者召喚の儀式の計画である。

そして、周りを取り囲むようにして配置された騎士達はもしも“人ならざる者”が手違いで召喚された場合の保険だ。

アリスと魔導師達が詠唱を進めていくと魔法陣が青白い燐光を放ち、微風が密閉された儀式場をなではじめる。

微風は徐々に勢いを増し始めみるうちに旋風となってその場にいる者を叩き始めた。

うまくいつている、誰もがそう信じ騎士達は救世の英雄がどのような容貌かを想像していた。

王城に到着した。

王城には騎士達が巡回しているが十重、二十重にも重ねた姿隠し、気配遮断の結界を張ったことで気付かれずに侵入できた。

（なんだ！この異常な魔力の流れは！！）

王城に侵入した途端、高密度の魔力が大気に乗って運ばれていくのが解かった。

（勇者召喚は五日後のはずだ！）

王族が国民に告知した日程まであと五日はある。だがこれ程の魔力の流れを推測すると異世界から何かを呼び出そうとしているしか考えられない。

先日の使い魔のおかげで王城の造りは把握している。迷うことも無く地下の儀式場にたどりついた。

硬く閉ざされた扉を隔てても十分に理解できる魔力。オレ自身の総合魔力ほどではないがかなりのもの。

オレが手をかけただけで扉は後方に吹き飛んだ。否、儀式場に吹き荒れるハリケーンのような突風が扉を押し飛ばしたのだ。

儀式場では第二王女と九人の魔道師が呪文を唱え、そして騎士達が強風に耐えていた。

中心にある魔法陣は青く輝き小さな稲妻が火花を放っている。

その火花が龍のように巨大化し、うねったその瞬間。

閃光、そして轟音。

しだいに視界が晴れていき皆が魔法陣の中心を凝視した。

「あれ、ここは……どこだ」

そこにいたのは日本で言う学生服を着た少年だった。

第十話 今後

「あれ、ここは……どこだ」

たかとき ゆうや
高時裕也は原因の分からない頭痛と目眩めまいに襲われながらも呟いた。
裕也は通う高校の学生服を着たまま魔法陣のような絵？の上に立っている。

「待っております。勇者様」

声のした前を向くと銀髪銀眼の美しい少女跪いていた。その一この世ならざる（地球にはない）容姿が裕也をいやでも現実に引き戻す。

「えっと……ここはどこ？」

「ここは勇者様とは違う世界にある一国、ルーレス王国です」

少女は可愛らしくはにかみながら返答する。

健全な男子たる裕也は背景に花が咲いていそうな笑顔にとぎまぎしつつ続いて質問する。

「違う世界って言うത്異世界ってこと？ それに勇者様ってのは何のこと？」

「はい、私達は魔王の脅威に立ち向かうため異世界より絶大な力をもつ勇者様を召喚したのです」

異世界召喚

そんな単語が裕也の脳内を何度も駆け回る。人並みにマンガ、小説の類をたしなむ彼にとってその文字はよく知っているからこそ天文学的数値な幸運よりも不吉な意味合いが強かった。

よくよく見渡せば周りには中世ヨーロッパ風の甲冑をまとった騎士とローブを身に着けたいかにも魔法使いといった体の者達。それが“ここは異世界”という追い討ちをかける。

そして、少女の言うように裕也が絶大な力を持っていて、それで魔王を打倒できるのかはさておき一番に重要な問題がある。

「俺は元いた世界に還られるんですか？」

言った途端、少女の顔が悲しそうに、気まずそうな表情になる。

「……それは」

「アリス王女、そろそろ……」

傍に立っていた騎士がそっと少女に耳打ちする。

（……待てよ。今、王女って言ったか？）

今さら後で面倒な罪に問われるんじゃないかと内心ビクビクしながら裕也は少女を見る。

「ああ、そうでした。勇者様、これより謁見の間で父上……もとい国王陛下に会ってもらいます。私についてきてください」

屈強な騎士に囲まれながら少女の後を追ひ、日本に還られるんだろ
うかと心配になりながら裕也はついさっきまで居た家を思い出して
いた。

高時裕也たかとき ゆうやはごく“平凡”な男子高校生である。

高校でのテストの点数はいつも平均辺りを迷走していてほとほとの
友人にも恵まれている。もちろん好きな女の子もいたし嫌いな奴だ
って勿論いる。

そんな彼の数少ない特徴に“正義への憧れ”がある。小さい頃から
日曜朝の戦隊物や仮面ライダー等など彼は勧善懲悪モノなドラマや
マンガが大好きだったのだ。

約二年前にあつた超能力者と普通の人間達の闘争があつた時も裕也
はボランティアとして被害を受けた一般市民を助けに奔走したもの
だ。

裕也が異世界に召喚される少し前、彼は高校からコンビニに寄り道

してから自分の家に帰ったところだった。

「ただいま。って、誰もいないか……」

裕也の両親はすでに他界している。理由は他愛もない交通事故だった。今は、悲しみも薄れ親族の縁を頼りながらバイトを掛け持ちして生活している。

裕也はリビングで持っていたコンビニ袋をテーブルに置いて床に転がっていたリモコンを使ってテレビの電源を入れた。

『 自衛隊基地から先月、一部のミサイルが消失した件について防衛省は空間移動系能力者が関係していると見て 』

偶然やっていたニュース番組は自衛隊基地からミサイルが盗まれた騒動を取り上げていた。映像には責任者がお約束のように機械的な謝罪をするで見計らったようにカメラのフラッシュの光が焚かれる。

超能力者

二年ほど前にそれを名乗る者達で構成された組織が現われ瞬く間に国内での内乱にまで発展した超能力者vsただの人。

今でこそ収まったが超能力者のリーダーは捕まっておらずダークスーツを着ていたとしか分かっていない。

『 続い…芸能……選手が、……かの電撃で 婚で……まし……… 』

「ん、電波でも悪いのか？」

テレビに妙な耳障りなノイズが混じってニュースキャスターの音が聞こえなくなってくる。おかしいと思いチャンネルを変えてみるがどこも同じようにノイズが混じっていた。

さらにテレビ自体が揺れ始めバチツと嫌な音とともに電源が切れる。

「なんか、ヤバイよな……」

裕也は苦笑いを浮かべ呟いた。これが異世界の招きの予兆だと解かっていたなら逃れられたかは知れないが足掻きようはあったのかもしれない。

気付けば様々な家具が揺れていてさながらB級のホラー映画のワンシーンと良く似た状態だった。

大切な両親の写った写真立ても床に落ちてヒビが入っていた。

ついには裕也の聴覚にも異常がではじめ奇妙な耳鳴りがわんわんと唸り平衡感覚までおかしくなる。ぼやける視界、その向こうに映る今までテレビがあつた場所は大量の墨汁を垂らしたような漆黒の大穴が穿たれていた。

大穴は少しずつ、少しずつ空気を吸うようにして裕也を引っ張り最後には旋風となって彼を強引に引き寄せる。

「待て待て待て！　どうなってるんだよ！」

裕也は必死に本棚を掴んで抵抗するが元々は遠き異世界にまで作用しうる魔力の奔流がそれを逃すわけが無い。結末は語るまでもなく旋風に屈した裕也が悲鳴をあげながら漆黒の大穴に吸い込まれるこ

とであつた。

こうして裕也は数多くある世界の一つに勇者として召喚されたのである。

ギョントアーは齒噛みした。

何があつたのか、ルーレス王国の王族による勇者召喚の大幅な前倒し。儀式場から全員が出て行つたあともギョントアーは残り一人思考していた。

勇者が召喚される前ならば魔法陣を書き換え、より効率よく、適正のある者を呼ばせることができたのだ。が、現に勇者は召喚されてしまった。それも日本の高校生らしい少年がだ。

日本にいた頃は超能力者と呼称された異能者達を指揮していたギョントアーならどんな能力を持っているかは人目で判るがあの少年は何処をどう見ても唯の平凡な一般人だった。ギョントアーの目を掻い潜

る程の“力”を持っているのならそれで良い。だが、本当に唯の一般人だったのならどうするか。

仮にも『異世界、地球の日本』と狭い範囲ながらその中から選ばれた一人なのだ。何かしらの“力”はあるだろうが、どうしても幾多の世界で出会った、英雄豪傑との格は劣るはずだ。

「オレが面倒を見るのか……」

もしかすると、と考えていたことはある。

問題はその勇者とどう接触し成長させてやるかだ。流浪の戦士を名乗り師となつてあの少年を指導するか、あえて好敵手の関係となつて互いに競い合うような容かたちにするか。

いや、それではダメだ。

師となれば結局今の魔王を討滅するのは勇者となる。これでは万が一の場合、助けに入れなくなるかもしれない。

後者の好敵手でもそもそも現時点で能力の差が格段に離れすぎている。

そうなると残るは……

ギューンターの脳裏に一つの人影が現われる。それは六百年前、勇者シルファの仲間であり恋仲であつた騎士だった。

「そうか仲間か。面白い……」

ギューンターの中で今後の方針が固まりそうだった。

第十話 今後（後書き）

指摘、ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4362z/>

元魔王と勇者vs魔王

2012年1月12日23時45分発行